

共生力

HP: <http://ajciee.or.jp/>

Tel : 055-269-6533 Fax: 055-269-6534

〒400-0031 山梨県甲府市丸の内2-32-16

甲府丸の内マンション 302

発行人：黒田文男

第4回日中教育文化交流シンポジウム開催



第4回ということで、「今回は、テーマに迫る資料を提示する中で、参加者から様々な意見を出してもらい、成果につなげていこう」という考え方で設定しました。協会の黒田文男代表理事、輿石東顧問からも開会の挨拶の中で、日中の教育文化交流の歴史や意義それから課題について話していただきました。

パネルディスカッションの始めに、コーディネーターの日中交流研究所所長の段躍中さんから、日本の言論 NPO と中国国際出版集団による世論調査「第14回日中共同世論調査」の結果について、説明していただきました。「日本世論：中国に良くない印象を持っている86.3%、中国世論：日本に対して良くない印象を持っている56.1%、日本世論：中国に対して良い印象を持っている13.1%、中国世論：日本に対して良い印象を持っている42.2%」という調査結果をどう捉えるか？日中両国民の印象の差は何から生じているのか？お互いに良い印象を持てる関係になるためにはどうしていったら良いのか？今日のシンポジウムの中で意見交換をしていくことが確認され、パネルディスカッションがスタートしました。

パネラーとして、黄安琪さん（第14回日本語作文

コンクール最優秀賞・日本大使賞、復旦大学4年生）、張君恵さん（第12・13回日本語作文受賞、長沙中日文化交流会館副館長）、朱杭珈さん（第12回日本語作文受賞、一橋大学大学院1年生）、雷雲恵さん（第11回日本語作文受賞者、文教大学大学院1年生）、大友実香さん（第1回「忘れられない中国滞在エピソード」コンクールの受賞者、翻訳者）、堀地綾さん（上海・台湾に遊学、会社員）、森本康太郎さん（台湾の大学へ留学予定、慶応大学法学部2年生）が、それぞれ意見発表をしてくれました。

中国のパネラーからは、「国と国との関係の中で、人と人の交流がいかに大切か」「文化交流を進める中でメディアの



果たす役割がとても大きい」「情報を、個人の段階でも画像等で拡散していくことが必要」「日中平和友好条約締結40周年を迎えさらに日中間の相互理解を進めていきたい」「『日本語ラジオ放送』を通して日本語文化に興味を持っている人がどんどん増えている」「ネット活動は壁を越えていく」「これからの文化の交流は、『フェイス・ツー・フェイス』となって行く」「日本語を学んでいく過程で『日本語作文コンクール』と出会い、その取り組みを通して日本語の実力をつけ、大きく人生が変わった」「日本語を学んだことで、日本の文化・行動様式・その他総てに興味を持つ、異文化理解の魅力や大切さを知った」「中国へ帰り、大学で日本語や日本の文化について教えていきたい」「日中交流の架け橋になりたい」「多文化共生の考えをしっかりと持つには、外国を訪れること、そこで暮らし、人々と接することがまず大切だ」等の発言がありました。

日本のパネラーからは、「中国での経験を通して、学ぶということは新しいことを知ることだと思う。それは、相手を知ることを通して自分を知ることでもある。相手の立場に立って考えたり知ることの大切さが分かった」「日本にいても中国や外国の方々ともふれあえる機会がある」「『あなたの名前を中国語で発音するととてもきれいな音になります』と、先生が話され、実際に中国語の音で名前を呼んでくれとても感動したことが、中国語の学習と中国への留学へと進むきっかけとなった」「日本の企業が中国でビジネスをすることの難しさは、言語の壁だと感じた」「交流会の中で、中国語を話す、歌を歌うということを通して少しずつ中国語の習得が進んだ」「『その国に行ったら、その国の言葉を話す』そのことの大切さが分かった」「どんなことでもきっかけをつくってくれたら、異文化への興味につながるのではないか」「とても信頼できる熱いパッションを持った中国人の先生に出会い、また、社会人（中国人）とも知り合い、留学を決意した」等の話がありました。

講評は、姫路獨協大学名誉教授で公益財団法人日本



中国国際教育交流協会公益審査委員の初岡昌一郎先生でした。先生は、「まず、この日中教育文化交流シンポジウムは、規模としては小さなもの

であるけれども、非常に大きな重要な役割を担って行われていて、十分な成果を上げている」と指摘されました。「特徴的なことは、日本やアジアの未来を示唆しているシンポジウムだ。その理由は、女性の方々の発言がほとんどだ」と述べられました。「これは良い意味のカルチャーショックだ。女性が進出している現場としては、日本では教育の場が挙げられる。世襲制が蔓延している国会が一番駄目だ」とも話されました。「文化については、日中の相違から学ぶことでプラスに作用できるし、それは、比較によって触発され進歩していくものだ。そして、文化の根は語学であり、人種ではなく、言葉から文化は育まれていく」と話されました。「ゆえに日本語だけの視野では真に狭く、文化を生み育てて行くにはとても不十分だ」と指摘されました。「今、中国について、ともすると、その成長ぶり、存在感、影響力を危惧するようなどらえ方があるが、中国は、回復途上国といえるのでは」と話されました。「この2500年くらいの中で、中国が世界のトップとして影響力を持っていた時期は2100年くらい、西欧は400から500年くらいでしかもそれは武力による支配でしかなかった。今後中国がトップという世界がきても、何ら不思議ではない」と話されました。

「歴史は変わるしまた変えられる」「歴史は歴史家が書いた歴史」「現在が現在にあった歴史を作り解釈する」と指摘され、「事実にどういう光を当てるかによって変わる」と説明してくれました。「フェミニズムという視点からは、武家・農民社会以外にあっては女性が有利で、例えば商業・商家の中心は女性だった」また、「エコロジーの視点から見れば、偉大な出来事である産業革命は地球破壊の始まりだった」と、教えていただきました。「歴史を国家や民族において考えていると対立が生まれてくる」と指摘され、「人々の生活をいかに守っていくか」「安全保障の考えこそが未来を示しているのではないか」とまとめていただきました。

日本語作文コンクール最優秀賞受賞者が黄さんが興石東協会顧問を表敬訪問



黄さんは、3月3日(土)に、日本教育会館5階の「東アジア教育文化交流協会」事務所に興石東先生を訪ねました。

先生から訪中時の貴重なお話や今後の日中の若者交流など

についての話を聞きました。記念品として「印伝のポーチを興石先生からいただき感激していました。

第14回日本語作文コンクール「教育賞」2名が決定!

2018年度第14回日本語作文コンクール(日本僑報社主催、外務省・在中国日本大使館後援、朝日新聞社など協賛)には、中国全土の省市区の235校から4288編の応募がありました。今回も日本中国国際教育交流協会賞(教育賞)の2編を選出しました。華



劉 齡さん



邵華靜さん

東師範大学の劉齡さんの「流行語からの発信」・青島大学の邵華静さんの「日本の『中国語の日』に私ができること」でした。

～ホームステイ参加者も進学～ “フジ国際語学院卒業式”

3月8日(金)、フジ国際語学院の卒業式が行われ赤岡業務執行理事が出席しました。1000名を超える卒業生は、今年も国公立大学に進学しました。フジ国際語学院は1989年の創建で、中国等からの留学生への日本語教育、基礎科目教育等の指導に、取り組み成果を上げています。教育交流ホームステイに参加した学生たちもそれぞれ進学しました。ホームステイでの体験を、今後に生かしてくれることと思います。



第36回理事会・第19回評議員会で 来年度事業計画・予算が決まりました

3月6日(水)に、第36回理事会と第19回評議員会が、日本教育会館7階703会議室で開かれました。2019年度事業計画(視察研修訪中団の派遣・山東省泰安市東平県への教育支援・第5次宋慶齡基金会訪日代表団の受入及び第4回日中音楽教育交流会・第8回教育交流ホームステイの実施・第5回日中教育文化交流シンポジウムの開催等)に関わる、予算(総額9,307,000円)が、全会一致で可決されました。

2019年度の取り組み予定

- 8月 第8回教育交流ホームステイ
 - 9月 視察研修訪中団(北京)
 - 第15回日本語作文コンクール
 - 10月 第5次宋慶齡基金会訪日代表団
 - 第4回日中音楽教育交流会
 - 2月 第5回日中教育文化交流シンポジウム
- ※ホームステイ・音楽教育交流会・シンポジウム
につきましては、広く呼び掛けて行いますので、
協会へご連絡の上、ふるってご参加ください。